平成 14 年度
ヌエック（国立女性教育会館）公開シンポジウム

シンポジウム

「女性情報を有効に使うために
― 女性情報シソーラスの開発と活用」

I　調査研究報告
江口　愛子（(独）国立女性教育会館情報課長）

II　シソーラスを組み込んだデータベースのプレゼンテーション
森　　未知（(独）国立女性教育会館情報課）

III　パネルディスカッション
コーディネーター：尼川　洋子（(財）大阪府男女協働社会づくり財団・大阪府立女性総合センター企画推進グループディレクター）
パネリスト：橋本ヒロ子（十文字学園女子大学教授）
安達　一寿（十文字学園女子大学助教授）
堀　　久美（WIN-L 代表）

日時：平成 15 年 3 月 2 日（日）　13：00～15：30
会場：ドーンセンター（大阪府立女性総合センター）特別会議室

I　調査研究報告

○江口愛子（(独) 国立女性教育会館情報課長）

1.　シソーラスとは

国立女性教育会館は、開館当初より女性に関する情報の収集・整理・提供に非常に力を入れてきました。そして、その成果として、15 万件におよぶ新聞記事インデックス・データベースや女性学・ジェンダー論関連科目データベースなどを構築し、また、女性情報に関するシソーラスを作ってまいりました。

シソーラスとは、「情報検索する際に用いられる用語を意味で整理し、同義語、広義語、狭義語、関連語等と関連づけた用語集」のことです。一般に私たちが情報を探す場合、まずは自由に思いついた言葉（フリーワード）で探すと思います。例えば、「セクハラ」という言葉で探すと、「セクハラ」という言葉が表題や内容などに記述されているものだけが、検索結果として得られます。「性的嫌がらせ」とか「セクシャル・ハラスメント」という言葉しか載っていない情報は探すことができないわけです。むろん同義語も見つかりませんし、その上位概念や下位概念の言葉での関連性も全くわかりません。

ところが、このシソーラスという仕組みを使って「セクハラ」という言葉で引きますと、「性的嫌がらせ」「性的いやがらせ」「セクシャル•ハラスメント」「セクシュアル•ハラスメント」等、同義語もすべて一緒に探してきます。それから、「性暴力」というのが上位概念としてあるということを教えてくれますので、こちらの方が本当は探したかったという見つけ方もできますし、反対に、より狭く専門的な概念として、「アカデミック•セクハラ」とか「キャンパス・セクハラ」という狭義語を表示しますので、このシソーラスを見て、自分が本当に探したかったのは「キャンパス・セクハラ」なのだということに思いあたり、あらためてそれを探すことも可能です。

つまり、シソーラスとは、表記の揺れが激しい日本語の特性をカバーし、検索の結果によって検索対象の範囲を広げたり狭めたりできる、効率的に探すための仕組みなのです。

2.　開発の目的

今回の女性情報シソーラス開発の目的は、大きく 2 つありました。1 つは、「会館及び各地の女性関連施設等の女性関連情報データベースを効率的に検索するための『共通キーワード』の整理と体系化」です。

実例を挙げますと、平成 2(1990)年に会館で作成した『婦人教育シソーラス第 2 版』（以下『第 2 版』と表記）では、索引語として「登校拒否」を採用していたのですが、他の女性関連施設等で使われている言葉を調査したところ、「不登校」という言葉の方がより使われるようになっていたということで、今回の女性情報シソーラスでは「不登校」を索引語として、「登校拒否」は同義語としました。このように、会館だけで使えるものではなく、日本全国の女性情報を探すのに使いやすくする配慮をしました。

2 つ目の目的は、「女性に関連する問題全般及び女性学・ジェンダー研究分野における『カテゴリー及び用語』の整理と体系化」で、これもやはり『第 2 版』から 10 年を経ていますので、その間の社会の大きな動きに対応するように整理と体系化をしました。例えば、今回は『第 2 版』にはなかった「エンパワーメント」という言葉を収録しています。

3.『婦人教育シソーラス第 2 版』との相違点

(1)　タイトルの変更

『婦人教育シソーラス』から、「女性情報」の検索ツールであることを示すため、『女性情報シソーラス』へとタイトルを変更しました。

(2)　用語数の絞り込み

『第 2 版』では、約 6,000 語を収録していました。会館では、シソーラスを作成した当初から、会館での図書、和雑誌記事にシソーラスを付与してきたのですが、キーワードとして使われた用語を分析したところ、使われなかったものが多かったことがわかりました。

そこで、新しい『女性情報シソーラス』に変更するにあたり、専門性の高すぎる用語の収録を見送るために、その付与が 11 回以上のものを洗い出し、これを基に、それ以後に必要となった言葉、あるいは他の日本の女性関連施設でよく使われているもの等々の調査をして、新しい用語の採用と削除を行い、結果として、索引語•同義語合わせて約 4,400 語を収録しました。

(3) 共同利用の促進

シソーラスそのものをデータベース化することによって、ネットワーク経由で内容的にも形式的にも共有することを可能にしました。

(4) 固定型シソーラスから更新型シソーラスへ

従来、『第2版』までは印刷体で提供していましたが、今回のものは電子媒体での提供となりました。また、シソーラスの編集そのものもインターネット経由で行うことができるシステムを開発しましたので、用語の変更等に柔軟に対応していくことができます。

現在も、随時、用語の見直しや更新を行っています。

4. 用語の選択・階層化にあたって

先程も申し上げたとおり、用語の選定・階層化にあたっては、『第2版』の洗い出し、分析を基礎として行い、それに基づいて主に "European women's thesaurus"、「大阪府立女性総合センター(ドーンセンター) 情報ライブラリーキーワード一覧表」、『女性問題キーワード111』、『女性学キーワード』、『フェミニズム事典(新版)』、『フェミニズム理論辞典』、『現代フェミニズム思想辞典』などを参考にして、女性に関する事象・事柄としての重要性という観点から、カテゴリーの選択、あるいは用語の選択・階層化をしました。

そのため、必ずしも各学問分野の用語の体系的収録とはなっておらず、また、前述のとおり専門性の高すぎる用語については、その採録を見送りました。

その他、「『婦人』『女子』は、意味的に問題ない場合、基本的に『女性』を用いる」「女性冠詞のついた用語は、原則として索引語には用いない」「差別ととらえられる語は同義語としても収録しない」「一つの用語の関連語は40までとする」といったことに留意していることが特徴です。

一般に、関連語は多いほどいいように思えますが、関連語を多くしすぎると、実際に検索したときたくさんのノイズが出てきてしまうので、こういう制限も付けています。

5. カテゴリーと内容

カテゴリーというのは、どういう分野に分けて、用語を収録し、階層化したかということです。先程、この調査研究は2年がかりだったと申しましたが、平成12(2000)年度にこのカテゴリーをどのようにするかを検討し、固めました。

『第2版』では9カテゴリーだったのですが、この『女性情報シソーラス』は14のカテゴリーになっています。『第2版』を基に分析し、20カテゴリーある "European women's thesaurus" を参考にして、利用者がより活用しやすいようにという観点から、女性情報の構造が見えやすく、しかも複雑になりすぎないようにということで、こういうかたちに決めました(次頁表参照)。

1つだけ例を述べさせていただくと、この表では12番目のカテゴリーとして「ことば・情報・メディア」があります。この部分は、2版では「文化・芸術・スポーツ」の中に含まれていましたが、やはり「ことば・情報・メディア」がより見えやすくということで、このカテゴリーを増やしたわけです。

最後になりましたが、ご参考までに調査研究委員会委員のリストとカテゴリー表を付けておりますので、ご覧いただければ幸いです。

調査研究会委員(所属・職名は依頼時のもの)

[主査]

田中　和子　国学院大学教授・本会館客員研究員

[委員](五十音順)

青木　玲子　越谷市男女共同参画支援センター所長

尼川　洋子　(財)大阪府男女協働参画社会づくり財団・大阪府立女性総合センター企画推進グループディレクター

池田　淑子　東京大学大学院法学政治学研究科・法学部図書閲覧掛長

加藤　直樹　岐阜大学教育学部附属カリキュラム開発研究センター助教授

神尾真知子　尚美学園大学総合政策学部総合政策学科教授(平成13年度)

亀田　温子　十文字学園女子大学社会情報学部教授

橋本ヒロ子　十文字学園女子大学社会情報学部教授・本会館監事

藤原　千沙　岩手大学人文社会科学部講師

船橋　邦子　大阪女子大学教授(平成12年度、平成13年度は外部専門家)

細谷　　実　関東学院大学経済学部助教授

伊藤眞知子　国立女性教育会館事業課研究員（平成12 年度）
高橋　由紀　国立女性教育会館事業課研究員（平成13 年度）
［外部専門家］
足立真理子　東京大学大学院
岡村　清子　東京女子大学文理学部助教授
堀内かおる　横浜国立大学教育人間科学部助教授
松原　洋子　三菱生命科学研究所特別研究員
村松　泰子　東京学芸大学教育学部教授、本会館客員研究員
［アドバイザー］
安達　一寿　十文字学園女子大学社会情報学部助教授・本会館客員研究員

Ⅱ　シソーラスを組み込んだデータベースのプレゼンテーション

○森　未知（(独) 国立女性教育会館情報課）

ヌエックのホームページで提供されている『女性情報シソーラス』のページから、シソーラスに関する意見・質問等をやりとりできる電子掲示板「女性情報シソーラスご意見番（板)」、このシソーラスに採録されている用語そのものを検索し、階層化表示する機能を備えた「女性情報シソーラス用語データベース」（図 1）を紹介した。

また WinetCASS（ウィネット・キャス）の中で既に『女性情報シソーラス』が組み込まれた HP-CASS（図 2)、文献情報データベースで、検索する際にシソーラスがどのように有効活用できるのかについてプレゼンテーションを行った。

女性情報シソーラスカテゴリー表

No.	カテゴリー	主な内容	収録語数	
			索引語	同義語
1	思想・理論・運動	フェミニズム、女性解放思想、哲学、女性学、ジェンダー、性差、性差別、性役割、男性学、女性問題、女性運動	149	78
2	歴史・民俗・宗教	歴史、女性史、民俗、人類学、宗教	93	31
3	教育・研究	教育、学習活動、学校教育、社会教育、家庭教育、女性教育、青少年教育、生涯学習、学術研究	365	138
4	性・心・からだ・健康	セクシュアリティ、性行動、性の商品化、買売春、性暴力、生殖、妊娠、出産、心理、発達、カウンセリング、健康、医療、保健衛生、リプロダクティブヘルス/ライツ	362	182
5	政治・政策・法律	政治、選挙、政策、女性政策、男女共同参画、ジェンダーの主流化、行政、国家、国際関係、外交、戦争、平和、条約、権利、人権、民族、法律、裁判	351	141
6	社　　会	社会体制、社会変動、社会関係、社会集団、社会問題、社会運動、社会活動、女性団体、ネットワーキング、ボランティア、地域社会、都市、農村、少子・高齢化、人口問題、貧困、犯罪	327	125
7	労働・社会保障	労働、無償労働、労働者、雇用平等、労働条件、職業、社会保障、社会保険、社会福祉、保育、介護、年金	424	298
8	経　　済	経済開発、開発援助、産業、企業、労働力、税、所得、金融	191	62
9	世帯・家族	家族制度、家族関係、世帯構成、単身者、結婚、離婚、家事、家庭、育児、ドメスティック・バイオレンス	224	112
10	くらし・環境	生活、ライフスタイル、家庭経営、消費者問題、環境問題	186	46
11	科学・技術	科学、生命科学、バイオテクノロジー、生殖技術	32	21
12	ことば・情報・メディア	言語、コミュニケーション、情報、ICT、マスメディア、ミニメディア、出版、報道、メディア・リテラシー	132	53
13	文化・芸術・スポーツ	表現、表現の自由、芸術、芸能、文学、ファッション、スポーツ、余暇、遊び、レクリエーション	158	56
14	一　　般	＊上記カテゴリーに共通して使用できる語。 例）影響、活動、参加、対策、多様性、評価、問題	71	8
計			3,065	1,351

（2003.3 現在。2 つ以上のカテゴリーに重複して収録されている用語もある。）

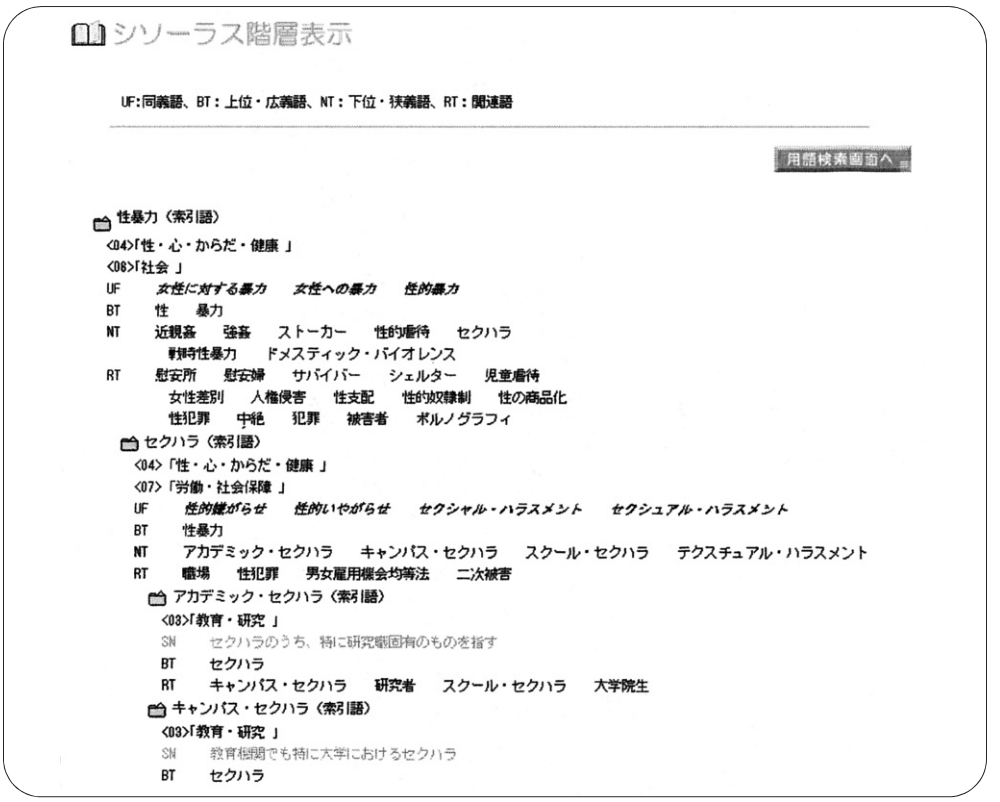

図1　女性情報シソーラス用語データベースで、「セクハラ」を階層表示した画面
*表示を指定した「セクハラ」の上位・広義語「性暴力」、下位・狭義語「アカデミック・セクハラ」等の関連語も表示します。

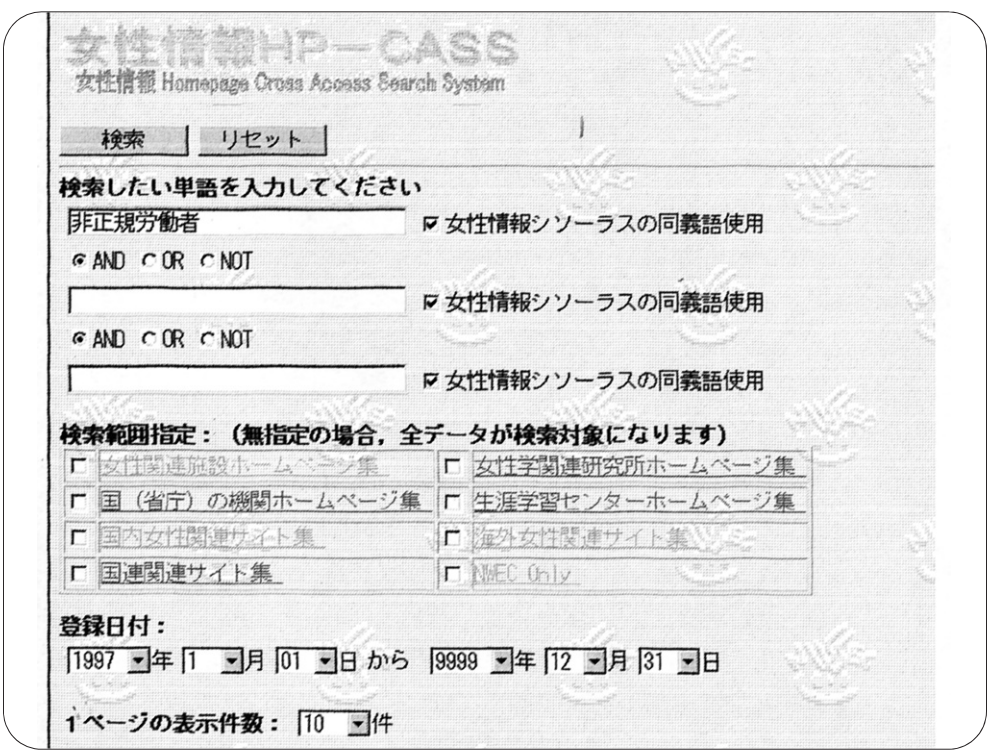

図2　HP-CASS（ホームページ・キャス：国内外の女性情報に関するホームページを横断検索できるシステム）検索画面
*「非正規労働者」と入力して検索すると、同義語として登録してある「非正規社員」「非正規従業員」「非正規職員」「非正社員」のうち、どの言葉が含まれているものも同時に探してきます。

III　パネルディスカッション

○尼川洋子（コーディネーター）：今日は「女性情報を活用する」ということをテーマにしたシンポジウムに、これだけたくさんの方が集まられています。私はこのドーンセンターができる前から女性情報ライブラリーを作るところにかかわってきたのですが、1994 年当時、ネットワークやパソコン通信を使ってさまざまなデータベースを提供していたのは、ヌエックとドーンセンターだけでした。

先程から、「シソーラス」というあまりなじみのない言葉がたびたび飛び交っていますが、この新しいかたちの女性情報シソーラスがヌエックのホームページ上で提供され始めたのは去年（2002 年）の 4 月 15 日です。大体こんなものだということは先程少し見ていただいたかと思いますが、シンポジウムをとおして、そのシソーラスをもう少し立体的に見てみたいということと、今日はやはり自分たちの活動や研究に使いたいという気持ちで来られていると思いますので、どうやったら使えるのかというところまでを皆さんと一緒に考えて、いろいろ工夫をしていきたいと思います。そして、「情報は力」だと言いますが、やはり必要な人に結びついて使われてこそ力になるわけですから、女性と情報が本当に結びついていくためのさまざまな取り組みも必要です。そういうところまで話ができたらいいなと思っていますので、よろしくお願いいたします。

今日は田中和子さんがやむを得ない用事で来られなくなりました。田中さんには、世界の女性情報にかかわる活動の動きと、さまざまなシソーラスと今度のヌエックのシソーラスを結びつけてお話しいただくことになっていました。それも含めて、橋本さんの方からお話をしていただきたいと思います。

○橋本ヒロ子：今回の『女性情報シソーラス』の開発は、その前の婦人教育シソーラス同様、国際的な協力関係の下に進められてきました。私からはそのお話と、さらにその中でどうして女性情報が必要なのかについても触れさせていただきたいと思います。

1977 年に国立女性教育会館（当時は婦人教育会館）が開設された当初から、その事業計画の中には婦人教育シソーラスを開発するということが入っていました。私は 82 年に国立女性教育会館に異動してきたのですが、すぐその基礎作業に着手し、83 年、婦人教育情報基本構想の策定にかかわり、84 年からシソーラスの開発を始めたわけです。

翌 85 年、ヌエックで日本で初めて女性情報の国際セミナーを開催したときに、アメリカの International Women's Tribune Center の事務局長だったアン・ウォーカーさんが、「情報というのは女性にとっては力なのだ」と発言され、私たちも「情報は力なり」と言い始めたのですが、情報といっても、女性をエンパワーする正しい情報でなければ力にはならないわけです。ところが、どうも女性たちには正確な情報がなかなか手に入らない。その背景には、やはり世の中の情報は権力を持っている男性たちが中心になって作り、流通しているから、女性たちにはなかなか届かない、それを力にできないという状況があったということだと思います。

余談ですが、International Women's Tribune Center というのは、1975 年の第 1 回世界女性会議のときにできた団体で、それ以降、世界女性会議のときに開催されるすべての NGO フォーラムの中心的な役割を果たしています。しかし、それからずっと大体同じメンバーでやってきたということで、その事務局長であるアン・ウォーカーさんは、それでは世代交代が起きず、女性運動の発展にもつながらないからと、去年その役割を下りました。母国のオーストラリアに帰り、今後はアジア・太平洋地域のネットワークづくりに貢献すると言っています。

そして、1986 年にヌエックは国連のアジア太平洋経済社会委員会（ESCAP）と共催して、女性情報のネットワークに関する会議を行いました。そこではっきり確認されたのは、女性の実態を表す統計情報が非常に少ないということでした。一方で、その年にアメリカで『女性シソーラス』が発行されたのです。私どもは日本ですでに 84 年から開発にかかわっていましたので、『女性シソーラス』の開発にも意見を言う立場でかかわってきています。

第 1 版のシソーラスを作るのは本当に大変な作業で、私たちはもう「死にソーラス」と言いたくなるような状況でした。まだコンピュータの発達が十分でないときで手作業でしたから、トイレットペーパーのようにつながった紙だらけの部屋の中で、死にそうになって皆で頑張りました。女性学というもの自身ができたばかりで、日本の中での位置づけが

なかなか難しかったものですから、私たちは壮大な目標を持って、女性学の体系化と女性運動の体系化も含めて、シソーラスを開発していきました。

国際的な流れとしては、そのころ「女性と開発シソーラス」というのがASEAN地域でも開発されました。これはASEANの女性プログラムの下、国立の女性センターや大学の女性センターが中心になって、ASEAN各国が協力して作ったものです。また、アメリカの『女性シソーラス（A Women's thesaurus)』は、ニューヨークに事務局を置いて、女性教育のセンターや大学の研究機関がネットワークを組んで作られました。日本では、国立の女性センターであるヌエックで、関連分野の女性学の研究者たちが中心になって1987年に初版を作ったわけです。これが1980年代の状況です。

そして、1995年に第4回世界女性会議（北京会議）が開催されました。北京会議では、女性たちがICT（Information Communication Technology）を使って、北京会議に来られない海外の人たちに情報提供を行いました。そして、北京行動綱領の12領域の中に、きちんと「女性とメディア」という項目が入り、その中で女性がいかに情報のアクセスから疎外されているかとか、女性がメディアを使うための教育を受けていないなどの問題提起がなされました。これは大きな成果だったと思います。

また、1998年には、オランダでノウハウ会議（Know How Conference on the World of Women's Information）という、女性情報に携わっている世界の女性たちの会合があり、そこで『ヨーロッパ女性シソーラス（European women's thesaurus)』が報告されました。実は今回の女性情報シソーラスの新しい版の開発・作成にあたって、私たちはこのヨーロッパのシソーラスを参考にしたわけです

が、このノウハウ会議に尼川さんたちが行っておられなかったら、私たちはそれを参考にすることができなかったと思います。

初版はアメリカの『女性シソーラス』を参考にし、今回はヨーロッパのシソーラスを参考にしたわけですが、だからといって、決してそれをそのまま真似したわけではありません。日本固有のことがたくさんあるわけですから、基本的にはこれまで開発してきた『婦人教育シソーラス』に基づき、利用者がどういう用語を使って検索しているかということをベースにしていますので、我々のシソーラスが、ただ海外の横文字を日本語にしたようなものではないということは理解していただきたいと思います。

そして、2000年にニューヨークで国連特別総会「女性2000年会議」がありました。私は日本、東アジア、アジアのNGOレポートを作るのにかかわったのですが、このときに本当にITを使わないと女性たちの会合はできないのだと痛感しました。2002年7月にはウガンダでノウハウ会議が行われるなど、どんどん女性情報の国際的なネットワークは進んでいます。この流れを推し進めていくためにも、シソーラスが必要なのです。できるだけ皆が同じ言葉を使っていかないと、考えていることが全然違ってきてしまうわけです。すでに今、そういう混乱がかなり意図的に起こされてきています。同じ意味の、同じ言葉を使っていくことが、女性のネットワークを強化していくことにもつながるわけで、その女性情報というのは、女性のネットワークをつなぐ「のり」のようなものだと言われています。シソーラスをうまく使っていくことで、女性のネットワークが効率的にうまく進んでいき、もっと力を付けていくのです。

今年（2003年）の12月には、ジュネーブで世界情報社会サミットがあります。今、そのための準備会合が行われているところですが、そこでもジェンダー・コーカス（ジェンダー部会）がすごく威力を発揮しています。女性たちの視点を入れていかないことには、女性たちが情報社会の中で取り残されてしまうという怖さがあるため、いろいろな活動が行われています。2月28日までジュネーブで行われていた2回目の準備会合でもジェンダー・コーカスは活動していまして、その成果として、例えば宣言案の中にジェンダーのことがちゃんと入っています。

女性はやはりデジタルディバイドというか、情報格差がある側なのです。ですから、そういう女性を対象にしたきちんとした研修などもされていかなければいけませんし、貧しい人たちの 7 割は女性という中で、なかなか情報機器にアクセスできないということがありますから、その女性たちを対象にした特別な施策や、さらに女性が政策決定の中に入っていくことも必要です。また、単に新しい情報機器を導入するだけでなく、女性たちが伝統的に使ってきたラジオなどの情報交換ツールも大事にする必要があります。そこで、女性が情報政策の中にきちんと入っていくことが必要だということや、いろいろな情報関係の会議の中に、関係の女性たちを 3 割は入れていこうという内容を決議案の中に入れるという活動がなされてきています。

来週から始まる国連女性の地位委員会の今年のテーマは、「女性と ICT とメディア」と「女性の人権と女性に対する暴力」です。「女性と ICT とメディア」というところで、どういうことが必要であるかを検討する。そして、その成果を世界情報社会サミットの中に入れ込んでいくことが、ジェンダーの主流化なのです。情報政策の中に女性を入れていく、ジェンダーの視点を入れていくという 1 つの流れが出てきているのです。私たちは、これまではとにかく世界女性会議のために一生懸命準備をしてきたわけですが、それだけではなくて世界環境会議や人権のための会議など、いろいろな会議の中にジェンダーの視点を入れていく。女性たちが政策決定の中にとにかく半分、できなければ今回みたいに 3 割というかたちででも入っていくことが必要です。それが女性情報の強化、拡大にもつながっていくのです。

女性情報が表に出てこないのは、やはり女性が情報を製作、提供していく中に入っていないからです。統計情報についても、今かなり出てくるようになってきてはいますが、まだまだ出てきていないものもたくさんあります。例えば、外で働いている女性と家にいる専業主婦とで、使うお金と入ってくるお金がどのように違っていて、生涯で見たらどうなっているかということのきちんとした計算が、まだ日本ではされていません。しかし、イギリスでは、日本でいえば内閣府の男女共同参画局にあたるようなところがそれをきちんとシミュレーションして、経済やジェンダーの専門家が計算をしたりしているわけです。

それから、皆さんも日々活動していらしてご存じのように、日本にはＤＶや女性に対する暴力などに関する本当にきちんとしたデータも、まだまだありません。よく言われる 3 歳児神話についても、日本でやったいろいろな調査を見ると、決して母親が家にいるだけで子どもたちがちゃんと育つわけではないという結果が出てきているのですが、それがうまく伝わらないということがあるわけです。きちんとしたデータがあれば、それに対してちゃんとした政策を起こすこともできるわけですから、そういう調査がきちんとされることも必要だと思います。

それから、ジェンダーの主流化の一環なのでしょうが、文部科学省科学研究費の領域分類の中に、ジェンダーの項目も出てきています。環境的には少しずつそのような状況が出てきてはいるのですが、出てきても、その成果をうまくマスコミが伝えてくれないという問題もあると思います。例えば、「子どもたちが専業主婦を一番望んでいる」というような歪曲したかたちで新聞報道されているのです。ですから、私たちは女性情報をうまく使って広報していくためにも、女性情報ネットワークだけでなく、既存のメディアもうまく使ってやっていかなければいけないのです。そうやっていろいろな場でジェンダーの主流化をしていくことが、女性情報をもっと幅広く、豊かで、強固なものにしていくことにつながっていくのではないかと思います。

○尼川：最前線にいらっしゃる橋本さんからは、本当はどうしたら世界の女性たちがネットワークや情報を格差なく使いこなすことができるかということについての地道な活動がなされているというお話もお聞きしたかったのですが、時間が少なくてすみませんでした。

大変駆け足でお話ししていただきましたので、ちょっと付けくわえさせていただくと、1998 年 8 月、オランダのアムステルダムで開催されたノウハウ会議の一番大きなテーマは、女性情報を目立たせるということでした。女の人たちの情報は見えないので、目立たせて、世界のどこからでもアクセスでき、活用できるようにするということが大きなキーだったのです。そして、サブのキーは「ローカル・リソース、グローバル・ネットワーク」ということで、地域にある情報を世界規模、地球規模でつない

でいって、女性たちの活動を広げていくことを活動の中心に据えてやるのだと。そのために何をすればいいかということで細かく分科会に分かれて議論が行われ、その会議の最中にヨーロピアン・シソーラスの完成が報告されました。

そのシソーラスを作り上げたことに、「私たちの宝物ができた。これでヨーロッパの人たちは共通の言葉で、国を超えて資料探しができる」とすごく喜んでいるのを聞いて、私はそんな宝物だったら土産に持って帰らなければいけないと思って、2冊もらいまして、1冊をヌエック大野館長にお送りしたのです。それが今回の新しい「女性情報シソーラス」につながったということで、これは情報というのはつながってこそ力になるということの1つの見本のようなものです。

私が世界の女性情報にかかわる人たちと交流したのは、アムステルダムでのノウハウ会議が初めてでした。私は図書館の出身ですから、それまで情報というのは図書館や情報の専門家が扱うものだと思っていたのですが、そこに来ていたのはいわゆる活動家の人たち、政府機関の人たち、教育者などで、今日の参加者の構成に近かったのです。日本は情報のことは情報の専門家だけがやって、活動の方は活動家がやるという感じでした。しかしノウハウ会議では、女性情報（ウィメンズ・インフォメーション）という言葉で専門家も活動家も教育者も一体になっていたのが、大変びっくりした点でした。今日はそれに近い状況が日本でも生まれているなと思っています。

続きまして、今回は、前回の「婦人教育シソーラス」の編集作業の時のように、「死にソーラス」にならなかったのは、1つはやはりITの力があったのと、それを活かす技術をもった専門家の協力があったということがあります。その中心的役割を担われた安達さんにお話しいただきます。

○**安達一寿**：皆の命の恩人の安達でございます(笑)。私の話は、簡単に言いますと、「シソーラスを使うと簡単に有効な情報が得られます」ということです。

今の世の中は情報社会と言われているわけですが、これは歴史的に見て10～15年ぐらいでしょうか。かつて情報化社会と言われていたものが今は情報社会と、完全にそういう社会に移行したということだろうと思います。

今日いらっしゃっている方の中には、いわゆる情報を発信する役目を担われている方も多いと思います。その流れを少し整理すると、今から10年ぐらい前は、いろいろな機関がホームページを一生懸命作っていた時期です。当時は中身よりは、ほかも出したから、とりあえずこちらも看板だけは出そうというような時代だったと思います。そういう時代から、今は少し中身を言われるようになってきていて、実際ホームページを見ている方たちに役に立っているのか、どういう情報を提供すれば役立つかという利用者側の視点に立ったものにしていかなければならないという段階で、いろいろな機関がたぶん四苦八苦されているのだろうと思います。

そして次に起こるのが、実際もうすでに起こっていることですが、情報の共有です。今までの情報のあり方というのは、情報の送り手がいて受け手がある、その間にいかに情報を流通させるかというモデルの中で考えられたわけです。ところが、今度は受け手と送り手の間が境目がなくなってくる、隙間がなくなってくるわけです。そうすると、お互いの持つ情報をいかに共有させるかという部分が大変重要になります。共有するにはもちろん情報システムも必要ですが、それよりもお互いに仲良くしてちゃんと協力しましょうという基本的な事柄が、大変重要になってくるのだろうと思います。そういう意味で、今回のシソーラス、会館が提供しているデータベースに関しては、実は眼目としては情報の共有を目指しながら女性情報を流通させて、その分野の方々の連携を高めるというところにもあるのだろうと思っています。

今回のシソーラスの開発は、特にデータベースを作ったり情報を提供する側の視点から見た場合、次

の 3 つの項目が大きな目的になってきます。

1 つは、時代の変化に柔軟に対応する用語管理です。今、時代の流れは非常に速いと言われています。本当はそんなに速くはないのですが、ともかくその時代の流れにどうやって対応させていくか。あまり対応させすぎてしまうと、先程のお話ではありませんが「死にソーラス」になりかねないということもあるわけです。そういう部分を、いかに今の情報システムを使って、サポート（支援）するかということが 1 つあります。

2 番目は、情報の共有です。特に図書館、情報センターなどのライブラリアン、レファレンサーといわれる職業に就いていらっしゃる方は、例えば本でしたら、書誌情報をどう付けるかというのが大きな仕事です。その場合にどういう言葉を選んでいったらいいのか、そのための辞書になってくるのがシソーラスです。ただ、今回作成した会館のシソーラスは、その機能にプラスして、これからの時代にどんどん発展していくであろうインターネットで使えるデータベース・システムということをまず第一義に考えています。要するに、これからのそういうデータベースに対して、的確な情報を逆に提供するという機能がここに入ってくるわけです。

もう 1 つ、これは共有というキーワードになってくると思いますが、今は女性情報に限らず、いろいろな情報のデータベースを持つ機関が結構増えてきています。このデータベースを作るのは、シソーラスを作る以上にものすごく大変なことなのです。データをどう集めるか。コンピュータで扱うわけですから、全部デジタル化をして、ためていかなくてはいけない。これはものすごい作業で、お金もかかります。そういう貴重な資源なのですから、当然お互いに使い合えたらいいだろうと思うのですが、今までのデータベース・システムは、それぞれ独立して置いてある形態がほとんどで、例えば検索のしかたなども結構まちまちでした。しかし、そういう関連機関のデータベースをある特定の方式にすれば、つまりここでしたら女性情報シソーラスということになりますが、それを用いることによって、よりわかりやすく検索ができるようになるわけです。会館では先程説明のあった WinetCASS という仕掛けを使いながら、各機関のデータベースを横断的に検索する仕組みを作っているわけです。

これら 3 つの視点それぞれの各論に入ります。

まずシソーラスの編集システムです。従来までは、本当に複数の人間が部屋の中に紙や本を散らかすというかたちでやらざるをえなかったわけですが、今回はインターネット上でシソーラスを編集する仕掛けを作ってみました。シソーラスの中には、索引語、関連語、上位概念、下位概念ということもありましたが、いくつかの種類の言葉が混在しますので、まず、その混在しているもののどれかということを指定する。索引語というのは、実際皆さんが何か検索するときに入れるキーワードのようなものです。スコープノートと書いてあるところには、簡単に用語の意味の解説が出てきます。そして、関連した用語がこの下に入るようになっています。

それから、ネットワーク上の複数の人間が、同時に 1 つの画面を見ながらディスカッションできるスペースがあります。実際は電子掲示板のようなものにコメントを入れるわけです。「この言葉をとりあえず入れてみました、皆さん、ご意見ください」と入れると、いろいろな方から意見が入るわけです。「やはりその用語はここに入れるのはおかしい」とか「この用語はこれと関連づけた方がいい」とかと、従来は部屋の中でやっていた作業が、全部ネットワーク上に置き換わって編集ができるようになったということです。これはかなり画期的なことだと思います。

ですから、ここでシソーラスの用語を追加することもできますし、あるいは関連語を追加したり、カテゴリーを変えたりすることがすぐできるわけです。仮にその結果がすぐに先程のデータベースの検索システムに反映されれば、リアルタイムに更新ができるデータベースの検索システムができてしまうということです。これは結構危険なことでもあるので、現在そこまでは対応していないのですが。

そんなシソーラスですが、実際どのように公開されているかというと、まずは PDF ファイルという形式で提供しています。この形式のファイルを読むためのアクロバット・リーダーというソフトは無料で提供されているため、パソコンさえ持っていればだれでも手に入れられて、それを使えばだれでも見ることができます。そうすることで、かつてあったような、ワープロの機種が違うと文書ファイルが見られないとか、機械が違ったらファイルが開かないということを一切なくして、皆が使えるようにして

いるわけです。

それからもう１つ、今度は利用者の視点ということになりますが、シソーラスの参照検索です。従来は、探す人がいきなりデータベースを見に行っていましたから、必ずしもヒットするかどうかわからないというところがあったのですが、シソーラスを経由することによって、1つの検索語をもとにして、同義語、あるいは関連している言葉をデータベースで探してくれるので、検索の漏れを防ぐことができるうえ、検索データの的確性というか、その精度を高めることができるのです。

実は漏れをなくすということと精度を高めるということは相反することなのです。そこで会館では、シソーラスを展開して利用者が選択できるような機能を設けているのが特徴で、これは関連する言葉に対していろいろな用語が出てくるようにして、それぞれの言葉について、いるとかいらないとかと自分でチェックを付けることによって、自分の探したい情報を見つけやすくする支援を行うというものです。

ただそうは言っても、先程女性のデジタルディバイドという話も出ていましたが、基本的に情報を探す技術、いわゆる情報リテラシーがないとなかなか使いづらいという感じもまだまだあります。そこで、使っている人には裏側の仕組みを一切見せないで、勝手にシソーラスの辞書を探して、勝手に見せてくれるように完全に自動化してしまおうという話もあったのですが、逆にそうしてしまうと自分の思いと出てきたものとの一致度が、かなり悪くなるということもあるのです。ですから、あえて見せることにして、シソーラスを見ていただくことによって、研修、教育にも有効活用していただこうと考えました。私も大学の授業でぜひ使いたいと思っています。

あと一点、組織間の情報共有ということです。実は今あるシソーラス・データベースというのは、ヌエックにあるものです。それをヌエックだけで使っているのはやはりもったいない、いろいろな関連機関で共有して利用できればよろしいわけです。それには、WinetCASS に登録して使う方法、あるいはシソーラス・データベースそのものを各機関の方に移行して利用する方法など、いろいろあると思いますが、それによって女性情報の共通利用に対して大きな寄与ができるのではないかと考えています。

○**尼川**：今お話があったように、今回開発されたシソーラスには、参照していただくことができることと、ヌエックだけでなく他のライブラリーとシソーラスを共有できるという２つの特徴があります。前のシソーラスは画面で見ることができませんでしたから、情報検索の際に物理的に使いにくかったのです。私たち担当者は、この２倍の厚さの冊子をくりながら、どういう検索語が関連状態になっているか調べなければならなかったのですが、そうしている間に、パソコン通信ですから、通信料がどんどん上がっていくわけです。ですから、ネットワーク上でそのまま参照できるというのは、今使われている人にはあたりまえのように思えるかもしれませんが、前世代を知っている私たちにとってみれば、ものすごく画期的なことなのです。

また、今まではそれぞれの資料の種類によって調べられることや調べ方が異なっていて、それは使う側が覚えておかなければいけないことだったのですが、それがシソーラスというかたちで一元化されていくということも非常に画期的なことで、さらにいろいろなところで使える可能性が開けてきているわけです。

さて、今までの話はどちらかというと作り手の話で、作り手はできればとにかくうれしいわけですが、ユーザー側からはまた少し違う視点があると思います。そこで、最後のパネラーの堀久美さんに、自分たちが活動していくうえで必要な情報を得たい、同時に自分たちが出した情報もきちんと電子化されて発信されていくという双方向性みたいなところで、シソーラスがどうかということをお話しいただきたいと思います。

○**堀　久美**：私はドーンセンターで開催された組織開発講座を受講し、その後、修了生で女性グループの活動のための情報交換・ネットワークづくりを目的に、WIN-L というグループで活動しています。WIN-L というのは Women's Information Network for Leaders ということで、今日のために作ったようなグループなのですが、交換する情報の１つとして、グループを作った年に、大阪府の各市町村では、女性政策の実際の事業としてどういうことをされているかという調査をしました。それをまとめた冊子の冒頭に、「私が講座で学んだのは、女性グループの活動にも組織運営の視点が必要であり、活動を継続していくためには、外に向かって訴え、広

がっていく力をつけなければならないということだったと思っています」と書いています。つまり、組織開発講座では、グループ活動の中で、情報というものをすごく大きく位置づけて学習したと思っています。

こういう調査をしていると、WIN-L は行政評価をするグループだと思われがちなのですが、これは決して評価ではなくて、私たちの目的は情報なのです。活動する中で、よりよい情報が欲しい、自分たちにとって必要な情報が欲しいということです。今、インターネットでとても手軽で便利と言われるのですが、情報収集と情報発信とは表裏一体の関係にあるもので、確かに簡単・手軽というのは大事なことですが、何のための情報なのか、何のための発信なのかがはっきりしていないと、その情報は有効に使えないのではないかと思います。私たちが出した冊子に載せてある情報も、情報そのものは行政などでも結構集めているのです。しかし、だれが何のために、だれに何を伝えようと思って編集したかによって、読んだときに、読める、読めない、わかる、わからないが違ってきます。「あなた方は自分たちがわかるようにとまとめているから、私たちにもわかるのだ」と言われたことがありますが、情報というのは目的だし、人だし、信頼関係だということを、活動の中で感じています。

また、会報を作って郵送するとすごくコストがかかるのですが、インターネットを使えば楽だしコストもかからないということで、私は当初から「LEO 通信」と名付けたホームページやメールマガジンを使って、活動の情報発信をしてきました。先程、橋本さんが縫田曄子さんのお話として、「情報はのりである」ということをおっしゃっていましたが、ネットワークを使って情報のやりとりをすることによって、全国に散らばっていてあまり会うことができない人たちとも信頼関係ができてとても深いつながりが持てるのです。

「NPO 活動に生かす IT 講座」で、松浦さと子さんという先生が、「利用者に情報を提供するとともに、利用者からの声を組織化して社会を変えていく、情報の循環システムを作る」とおっしゃっていますが、私も活動の中の情報というのは、双方向性で、それが次に人を動かし、社会を動かしていくものになっていかないといけないと思っています。そういう立場で、私はずっとメールマガジンを出しているのですが、その中で信頼関係、双方向性ができてきています。「これについて、皆さんどんなふうに思いますか」と投げかけると、そのお返事がいただける。前号の記事に対してのご意見をまた次の号で発信するというかたちでやっています。ですから、今回この席に私が座るにあたっても、私一人の経験をしゃべるよりは、私のネットワークで活動している人たちの意見をいろいろ聞いて話した方が説得力があるだろうということで、メールマガジンの中で、「今回こういうパネルディスカッションがある。それからシソーラスというものがあって、私はそこで発言するのだけれども、ほかの皆さん、いかがでしょうか」という呼びかけをしました。

今日の資料の「ヌエックニュース 100 号」にもシソーラスの説明が書かれていますが、それに比べると、私がメールマガジンで書いていることは、とても回りくどくて読み比べるとわかりにくいのです。それはなぜかというと、「ヌエックニュース」では、女性情報を検索することを大前提としているからです。そういうことができるととてもいいでしょう、こうやったら検索できますよと書いてあるのです。しかし、私が思うのは、私たちの活動の中で、文献検索しなければいけない必然性は、それほどありません。もちろんした方がとても有効であったりはするのですが、それにかける時間と有効性とをはかりにかけたときに、必ずその手段をとるかどうかはわからない。ですから、もっと何もないところから、シソーラスというものがあるのだと。女性情報のために WinetCASS があったり、あるいは今日のパネルディスカッションがあるというところから、この記事は書いています。

そのせいかどうかわかりませんが、返ってきた反応は、「難しい」「わからない」「ちょっと見に行ったけど、結局何なの?」みたいな意見が結構ありました。私自身もとても利用が難しかったのです。私一人難しかったのだったら、私の出来がとても悪いみたいで、この場で言うのは躊躇されたのですが、ネットワークの皆さんの意見ということで、少し言いやすくなりました。やはり情報というものが自分の専門分野でない人間からすると、とてもわかりにくいようです。もちろん『第 2 版』の冊子体のものを使っていらっしゃった方からすると画期的で、とてもす

ばらしいという話も、私の方にも入りました。

とてもすばらしいと言っている人と、何のことだかよくわからないと言っている人との違いは、わずかだと思います。何に使えるのか、どんな場面で使うと有効なのかというイメージ、何か一つでも手掛かりや事例が自分の体験の中であった人にとってはとてもわかりやすいのですが、そうではない人間からすると何なのかなとなってしまったということなのではないでしょうか。

私はさっきから「わかりやすく」ということを言っているのですが、これは決して幼稚園児でもわかる言葉で説明してくれということではありません。情報を簡単にすることは、薄めることではないと思います。これだけのきっちりとした、すばらしい内容で、何のためにこれが必要かということが、私達の感覚としてわかることが大切だと思うのです。

先程からここでパネラーの方々や尼川さんが話してくださっていることというのは、伝わってきます。でも、ホームページを見てもそれが伝わってこない。その落差を補ってほしいと思っています。私は女性センターの講座から出た人間ですし、何かあるとライブラリーの相談カウンターに行って相談するのがパターンになっている人間です。だからこそ、女性センター、あるいは情報専門員さんが、ヌエック、あるいは研究してくださった先生方の思いやノウハウと、活動している私たちのミスマッチの部分を埋めてくださるようにお願いしたい。

まだ１歳ということなので、これからの事例の蓄積によって、ずいぶん違ってくるだろうと思います。男性情報に比べて、女性の情報は格差があると言われていますが、一方で女性の中での格差、シソーラスが使える人と使えない人で、これから先どんどん力に差が出てくるようなことが、今までの経験の中でとても怖いと思っています。そこでピラミッドの上と下みたいに分かれるのではなくて、横につながれるため、そのためのシソーラスなのだから、そこが逆の効果にならないようにしてほしいと思います。

とはいえ、これだけの宝の山ですから、私たちの活動の中では情報はなかなか使えないと、指をくわえているなどという、もったいないことはできません。なんとか活用方法を見いだそうと、もちろん文献検索にも使いますが、もう１つ、大変便利な使い方を見つけました。私たちの活動の中では、ちらしを大変よく作ります。その中で、私は活動の趣旨として「家庭責任」という言葉を使ったのです。そうするとメンバーの中から「家庭責任？　家族的責任という言葉もあるけれど、これでいいの？」という意見が出てきました。では、どんな言葉が適当なのかというときに、シソーラスを調べると同義語、関連語、上位語、下位語が出てきます。いろいろな言葉の概念を立体的に見る中で、どれを使うか、自分の中で納得できるのはどれかを考える。あるいは、もう少し調べたければ、HP-CASS の方で用例集を引いてくれば、どんなときにどの言葉がよく使われるか、どんな文脈、どんな分野で使われている言葉かということがわかるのです。今の例では、「家族的責任」というのは ILO の条約の話の中でよく使われています。このちらしの中に ILO 条約の言葉はべつに使わなくてもいいと、自分たちの中で「家庭責任」の方がわかりやすければ、それを使うというように、人に伝える言葉を選ぶときにシソーラスで言葉を確認するということには、案外使えるのではないかと思っています。

○**尼川**：辞書として使ったのですね。今、堀さんのお話にもあったように、やはり必要な情報にたどりつくためには一定の検索技術が必要です。私が女性センターという現場で情報提供をしていて感じるのは、女性たちの求める情報は、大変切実なものが多いということです。とにかくその情報を得なければ次に何か行動できないというような差し迫った問題が多いのです。これは大学の図書館ではあまり経験しなかったことです。ですから、やはり十分に必要な情報を調べて、ちゃんとつなぐという技術が求められるわけです。そういう意味では、つなぐ場として、また情報と出会う場として、日本の中にたくさんの女性センターができて、その中で情報の提供が公共性を持ってやられるようになったことは、日本の女性たちにとって大きな進展だったと思います。

今日は、女性関係施設の人たちが一番多く来られています。現場でこのシソーラスを活用しながら、どうやって女性と情報を結んでいくかということで、ドーンセンターの木下さん、今の堀さんのご意見を受けて、ご発言をお願いします。

○**木下**：ドーン情報ライブラリーの木下です。堀さんがキーパーソンは情報専門員と書いておられます

が、それは私も含めて、女性センターの情報担当者へはっぱをかけていただいたのではないかと判断しています。今日はシソーラスということで皆さんお集まりなのですが、私たちのように情報の仕事をしていないと、シソーラスというのは本当になじみがないですね。一般的によく使われるデータベースでも、シソーラスを採用しているのは、新聞記事の日経テレコン 21 ぐらいです。だからこそセンターの私たち担当者は、自分自身がヘビーユーザーであると同時に、利用者の方と女性情報シソーラスをつなぐコネクターのような役割を果たしていくべきではないかと思っています。例えば、それはカウンターでお問い合わせを受けたときの１対１のレファレンスでもできますし、あるいは講座で使い方の例を示させていただく、広報紙やホームページでレファレンスの事例を出していくなど、いろいろな方法があると思うのです。そういうことで、本当に役にたって便利なのだというイメージを示していくのが私たちの役割ではないかと思います。

それと、これからいろいろな事例が生まれてくると思いますので、ぜひ皆さんと使い方のイメージについて情報交換していけたらいいのではないかと思っています。コンピュータ上の情報検索だけに使うものではなく、先程のちらしの言葉を選ぶときの辞書みたいな役割もあると思いますし、あるいはファイリングをするときの見出しの情報分類にシソーラスの大きな概念の言葉だけ使うとか、使い方はたくさんあると思いますので、これからますますシソーラスを活用していくためにも、まず皆さんと情報交換できる場があったらいいのではないかと思っているのです。その場はすでにヌエックのホームページに電子掲示板がありますので、そういう場を活用して、どんどん私たちがよりよきものにしていく。シソーラスというのは、本当に１つの女性センターだけでできるような生やさしいものではないのです。ヌエックが声かけしてくださって、専門家の方がかかわり、技術的なサポートをする方がかかわってくださってできたもので、すべての分野にシソーラスがあるわけではありません。本当に貴重なもので、私たちは女性情報の分野にシソーラスがあるということを、すごく幸せに感じながらやっていきたいと、あらためて強く思いました。

○**尼川**：相談の中で、何か具体的に活用した例があれば教えてください。

○**木下**：昨日の午後の事例ですが、ある医療関係者の方が、論文を書きたいということでみえました。その方はべつに研究者ではなくて、現場の方なのですが、ご自身の仕事を踏まえて学術誌に投稿したいということで、そのテーマが立ち会い出産だったのです。「先行研究を調べたいのだけれど、いろいろなデータベースを調べても、立ち会い出産では出てこないのです」とおっしゃったのです。どういう言葉で検索をしたらいいか。これはシソーラスだと思って、ほかのいろいろな索引を使ったりするときの言葉の選択のために、まずヌエックの女性情報シソーラスだったらどういうやり方があるのかということを、昨日実際やってみました。このように、研究や学習のサポートとして、最初の段階、事前調査の段階で、今なさろうとしていることがどういう分野に属するのか、関連分野にどういう情報があるのかなどをまずつかもうとするときに、とても役に立つなと実感しています。

○**尼川**：情報を体系化するというのは、そういうことですね。ばらばらにあるものがきちんと体系化されることによって、もれなくすくい上げられていく。そして上位概念、下位概念、関連分野というかたちで検索が多様にできるということです。特に女性情報、女性の活動というのは、どんどん新しい分野を開発していきますし、今までの学問体系の中に入らないことが作られていくわけですから、当然、新しい言葉が生まれてきます。そうすると、従来の、例えば図書館の分類法では分類しきれないということで、図書館の件名には上げられないものが次々と出てきます。その点が、女性情報、ジェンダーの問題について調べたい、情報を得たいというときの１つの壁になっていたように思います。それが、シソーラスというかたちで、特に女性の分野で使われているキーワードを網羅的にすくい上げて、それを整理して、体系化したということで、木下さんの発言のような使い方が可能になってきたということでしょうね。

○**参加者**：私は名古屋女性会館の図書資料室で働いています。今までもヌエックでたびたびお話を聞いていましたが、今日またお聞きして、非常に整理ができました。自分の仕事と対照させながら見ていてあらためて感じたのは、自館で持っている情報をき

ちんと整理しておくことが、やはり利用者にとって一番役に立つことなのではないかということです。現場にいる者としては、そのうえに同時進行として、すでに構築されているいろいろな情報をいかにうまく役に立てていくか、膨らましていくかという情報検索能力を身につけていかなければならないと思いました。

2つほどお願いと質問なのですが、1つは現在はor検索なのですが、and検索はできないかという質問です。もう1つは、当館もヌエックの次の年に名古屋市婦人会館というかたちでオープンして以後、25周年を迎えようとしています。したがって情報量も多く持っています。ただ、人なし、金なしの中で検索機能を持っていなかったのですが、いろいろな状況の動きがありまして、このたび構築中です。このシソーラスを今、うちの情報にどうデジタルの関係で張り付けていけるのか、いけないのか、お金がかかるのか、かからないのかということも教えていただけたら、ありがたいと思います。

○**尼川**：今出たご意見の1つは、現場の担当者としてこのツールを使いこなしていくには、もとになる情報をきちんと電子化していかなければいけないということでした。今まで、女性たちの情報というのは消えていってしまっていたのです。出版社で本を出せば、それはデータとしても残りますし、国立国会図書館にも残ります。でも、女の人たちの活動の情報発信は、ミニコミです。ミニコミは主流のメディアではないので、その記録が残っていかない仕組みでした。女性センターができてきてから、それらをきちんと集めて整理をして、さらにもう1つ進めて電子情報化することで、ミニコミが地域を超えられるようになりました。そういう役割が女性センターにあるのではないかということを踏まえたうえで、では、この検索ツールとしてのシソーラスを、それぞれのところに組み込んでいくということについて、これは安達さんへの質問になると思うのですが、これはドーンセンターとしてもお伺いしたいところです。先程、データベースとしてシソーラスが提供できると簡単におっしゃいましたが、皆それぞれデータベースとか検索のシステムを持っていますから、それを一から作り直してシソーラスを入れることは不可能です。ですから、既存の仕組みの中にそれをくっつけて、うまく手軽にできるのだろうかという疑問はかなりあると思います。それとor検索、and検索のことも含めて、お願いします。

○**安達**：まずand検索or検索の話です。これは結論から言うと、できるのですが、ちょっと工夫が必要な場面があるのと、ケースによって実現が簡単かそうではないかというところがありますので、整理をしてお話ししたいと思います。

資料のWinetCASSの検索画面のところを見ていただくと、ここにand, or, notという選択肢が付いています。通常の検索ですと、キーワードを入れる枠が3つほどありますが、そこにワードを入れて、andとか、orとか、何で結ぶかを指定すればいいと。そういう意味で、このレベルではand, or, notの検索ができることになります。これはまだシソーラスを使っていないレベルです。

次にシソーラスを使う場合です。枠の右側にチェック印が付いていまして、シソーラスの使い方も同義語を使う場合と関連語を使う場合で扱い方がやや変わってきます。まず同義語の場合ですが、同義語というのは意味が同じということですね。意味が同じということは、逆にいうと、andという選択肢はありえないことになるわけです。例えば「非正規労働者」と「非正規社員」。これをandをかけても何も出てこないということが当然起こるわけです。同義語の場合は、orで結ばないと、基本的に検索論理というか、シソーラスに矛盾してしまうことになりますので、ここは当然orだけということになります。

次に関連語ですが、これが実は一番扱いが難しいのです。例えば「夫婦別姓」というキーワードに関連する言葉ということで、同義語としては「夫婦選択別姓」「夫婦別氏」「別姓」、関連語として「改姓」「結婚」など、いくつかのものが並びます。この段階でできるのは、or検索になります。これはシソーラスを使うことの意味をどう考えるかということですが、いろいろな関連する言葉がある。それに関連した情報をとりあえずすべて、もれなく集めようというある種のポリシーがあります。もれなく出したいときは、とにかく関連して引っかかりそうなものを全部出してくることになりますから、当然そこはor検索になってくるわけです。

ただ、この段階で実はand検索ということも当然ありえます。これはシソーラスの構造自体の問題に

もかかわるのですが、言葉の意味が非常にきれいに階層化されると。今、一番きれいに階層化されるといったら、例えば生物の分類、人間は○○目○○科という、系統図みたいなものはかなりはっきりしているので、そういうものには向くのですが、我々が使っている普通の言葉というのは、やはり意味の広がりとか、いろいろな使い方をされますので、階層関係があるとはいっても、いわゆるツリー構造のような段階的に並ぶものではなくて、言葉自体がネットワーク的に関連が構成されているようになります。そうなると、実は or 検索だけでは足りなくて、and 検索が必要な場面があるということも、確かに理解できる線です。

ただ、実際に今このシソーラス展開したところで、and 検索はできません。or 検索だけです。では、どうするかということですが、これとこれとこれを and でやりたいとなったら、その前のキーワードを入れるときに、フリーキーワードをスペースで空けてください。例えば別姓、改姓、結婚を and にしたいとなったら、別姓スペース改姓スペース結婚と入れ直してほしいということです。それによって一応実現は可能です。ただ使い勝手としては、やややりづらいということはあります。これもどこまで実現できるかということになるわけですが、例えばこの夫婦別姓に関しても、15〜16 個関連語が出てきています。そこで and, or の関連を付けるとなったら、この 15 個の言葉について、全部 and, or を付けなくてはいけないのかとなると、はっきりいって嫌になってしまうかもしれないということもあるわけです。そんなことも考え合わせまして、今回はとりあえず or 検索にしてあります。もちろん今後の利用の状況を見ながら、検討する可能性もある部分です。作っている委員の方でもだいぶ議論しましたが、難しいところです。

次の質問の、自館のデータベースに組み入れられるかという話ですが、基本的な条件があります。これは例えば名古屋なら名古屋のセンターのデータベースに、検索機能が付いているかどうかということです。この会館にあるように、例えば何かキーワードを入れて検索ボタンを押すと、データが出てくるという仕掛けを持っているものであれば、組み込む、あるいは会館の方から WinetCASS のようなものを使って、横断検索のデータベースの一部として利用することは可能です。検索システムが付いていないデータベースというのはありえないはずですが、たまにその部分の仕掛けがうまい作りをしていないと、横断検索はちょっと難しくなります。

その場合にはどうしたらいいかというと、実は、組み込みには 2 つの方法がありまして、1 つは、今、会館で提供している WinetCASS のデータベースの横断検索の方に登録をして、そこから見られるようにするというやり方です。そうすると、シソーラス検索システム自体は会館の方で動いていますから、皆さんの方の機関は特に用意するものはなく、会館の方に登録してもらえばいいというだけのはずです。そうすれば、自分のところで動いているというよりは、むしろ WinetCASS のデータベースの一部として動くようなイメージにはなりますが、一応シソーラスを使った検索がそれぞれの機関でできることになります。

もう 1 つの方法として、シソーラスのデータベース＋シソーラスの実際の検索式をそれぞれの機関のデータベースの方に移植する方法があります。これもケースバイケースですが、一般的に言えば、移植ですから当然開発費用もかかります。予算的な措置ができれば、そういう方法もありえますが、移植をした場合には、メリットとデメリットが出てきます。一番のデメリットは、例えば会館の方でシソーラスを先程柔軟に変更するということがありました。完全にそのシソーラスのデータを移行してしまうと、会館が直したとすると、それをまた今度自分の方で同じように直すということで対応しなくてはいけないことになるわけです。逆にメリットとしては、コアの部分は会館のものを使えることです。自館の部分に関しては自館の部分を組み込んで、少し直しながら使いたいということであれば、自分の施設に持っていて、会館のものを元にして、自分たち独自のシソーラスをどんどん拡張できるという可能性は出てくるわけです。

ですから、実際の使い方に合わせて、あと、実際問題として一番大きいのはお金の問題かと思いますが、そのあたりで考えられたらどうかということになろうかと思います。

○尼川： ありがとうございました。実はドーンセンターもちょうど今年の 9 月にシステムのリプレイスを控えていまして、できれば 2 番目の方法ができな

いかと思っているところです。

今日は参加者の中で、大学の研究者の方、また大学の図書館の方、学生の方が30名ぐらいお申し込みいただいています。そういう教育の現場などで、検索ツールとしてシソーラスが使えるかどうかということを含めて、ご発言いただけませんでしょうか。

○**参加者**：図書館に勤務しています。今日はシソーラスの方に興味があって来ました。今、私どもの図書館では、目録情報に件名以外にキーワードを入れる作業を行っているところで、キーワードをどのようにして入れていくかということの参考にしたいと思って来たのですが、お話を聞いて、キーワードをただ入れるだけではなくて、やはり体系化ということが大事なのかなと思いました。そのことについて、もっとアドバイスをいただければお願いします。

○**橋本**：1つの大学の図書館だけでの体系化というのは、ちょっと厳しいかもしれません。ですから、大阪女学院大学でカバーしていらっしゃる分野のシソーラスを使うというかたちにされればいいのではないかと思います。女性問題の資料を使っていらっしゃれば、女性情報シソーラスのキーワードを入れるとか、ほかの分野のことをやっていらっしゃれば、その分野のシソーラスからキーワードを入れ込むというかたちにしていかないと、1つの図書館でキーワードの体系化というのは本当に大変なことだと思います。

○**尼川**：今はシソーラスの方からでしたが、女性情報を探したい、女性情報と双方結びつけたいのだけれど、なかなか現状は難しいということで何かお困りのことがあればお話しいただければと思いますが、いかがですか。

○**参加者**：大学の講師をしております。教える側として1つ質問させていただきたいのですが、私の大学ではトピック・スタディのクラスがありまして、そこで私は「ジェンダー・アンド・アイデンティティ」という授業を教えています。3週間ほど前に学生から1つ質問を受けまして、彼女はＧＡＰという子ども服や若い人の洋服を扱っている洋服屋さんでバイトをしているのですが、子ども服に関心を持ちまして、子ども服に見られるジェンダー観を調べたいと言ってきたのです。私はこのシソーラスに関してははっきりとした情報を持っていませんでしたので、とりあえずYahoo！とGoogleで「子ども服」とか「ファッション」と入れて情報を見つけたらどうかと言って、彼女なりにやったらしいのですが、全然関係ないものがたくさん出てきたり、信頼性が欠けるようなものが出てきて、うまく見つからなかったそうです。例えばこのように子ども服に見られるジェンダー観を調べる場合、まずはファッションに入ったらいいのでしょうか。どのようにアクセスすればいいかということです。

○**橋本**：ヌエックでは、そういう場合には雑誌記事で出てくると思います。「子ども」と「服装」だとか、「子ども」と「服装」と「ジェンダー」というようなキーワードをand検索でやる。and検索のやり方はちょっと特殊な技能がいるかもしれませんので、図書館の方にやってもらってもいいと思います。そのようにしてやっていくと、雑誌記事や雑誌論文が出てきます。ヌエックの図書館の情報の中には、Yahoo！などで出てくるものとは違った、きちんとした学術的な論文が、検索のしかたによって出てくるはずです。

○**木下**：子ども服に見るジェンダーだったら、私もまず絶対に用語として登録されているであろう言葉、「子ども」「ジェンダー」「服装」などで検索します。まず雑誌記事検索をして、近い内容の雑誌記事が見つかったら、そのデータを開くのです。そうすると、この分野の論文にはヌエックのデータベースではこのキーワードを付与されているのだという幾つかの用語が表示されます。用語をクリックすると該当する用語での検索結果も得られます。あるいはその言葉をもう一度入れ直して、シソーラス展開させたりすると、頭の中で最初に思いついた言葉よりも、もっと的確な言葉が検索しているうちに見つかります。それは専門家といいながら、本当にお問い合わせを受けた方と一緒に広げたり狭めなりしながら、やっています。

○**参加者**：私は名古屋でずっと在野で活動しております。まずシソーラスについては、本当にすばらしいものができたと思っています。自分にとってもありがたい話ですが、実は大学で新しく情報文化学科というところができて、やっと今年から3年生に「ジェンダーとメディア」という講座を持てますので、そこで早速このシソーラスを使って、ワークショップ形式でいろいろなことをやってみたいと思います。情報の担当者の方などがこれからどんどん

広めていかれるのでしょうけれども、普通の人たちもこれを使いこなせるような講座をそれぞれの会館でやられたらどうかと感じたのが１点です。

もう１つ、名古屋市で今年の６月にオープンします男女平等参画推進センター「つながれっと名古屋」というところの情報の事業の一部をお手伝いしています。その中で、まさに地域のいろいろな情報を収集して、精査して、公開するように分類基準を作ったのです。そのときに一般の人たちともさんざん議論をして悩んだ結果、まずカテゴリーのところに出てくるものを、例えば「生きる」「働く」という言葉でくくりました。大分類はそれ。中分類の中が主な内容の中にあるようなものを入れ込んで、小分類は全く表には出しませんが、収集をする担当者が、だれが来てもここに何を入れたらいいかわかるような、具体的な小分類をたくさん作りました。先程、堀さんもおっしゃっていましたが、私もいろいろな活動をずっと続けてきて思うのは、それで何になるのかというところが、やはり研究者のレベルと一般の方とで若干違うということです。とにかく「生きる」ということで、わざと大きくくくりまして、普通の方が入りやすい入り口を１個作りました。これがどういうかたちで公開されるかどうか未定ですが、今、そんな準備をしています。

○**尼川**：本当にいろいろな工夫ですね。どうすれば結びつくかということで、さまざまな活動がされているということが出てきました。ありがとうございました。いろいろまだお聞きしたいこともあるのですが、時間が来ておりますので、パネラーの方に一言ずつお願いして、終わりたいと思います。

○**堀**：私は今日、活動の中での文献検索とは何なのか、シソーラスとは何なのかということを言っていたのですが、逆にいうと、縦のつながりがあり、横の広がりがある女性学の分野だからこそ、シソーラスによって体系化されることの意味があるのです。これによって体系化されるのは文献だけではなくて、例えばグループの活動自体がこのシソーラスの中に入ってくることによって、だれと一番情報交換をしたら有効であるかとか、日本だけではなくて世界に広がって、そういうことが見えてくるような広がりをすごく感じることができました。ぜひ、より多くの人がそれを実感できればいいなと思いました。

○**安達**：シソーラスというのは以前は専門家のものだったわけです。ただ、こうやって情報提供できることになると、たぶん一般の人が思わぬ使い方をしてくれるのではないか。そこからまた新しい使い方や利用のしかたが見えてくると思うのです。ですから、ぜひ使っていただいて、それも思わぬ使い方をしていただいて、よりよいものにしていけたらいいのではないかと思います。

○**橋本**：一緒なのですが、ご意見番というところにぜひ意見を書いていただいて、皆のシソーラスになるようにしたいということと、大学の研究者の方はぜひ学生さんにこれを使うようにしていただければ、もっといい内容の論文が書けると思いますので、ぜひよろしくお願いいたします。

○**尼川**：今日はシンポジウムをとおして、だいぶシソーラスをかみくだけたのではないかと思います。女性がインターネットを活用し始めたのは、1995 年の北京会議以降ですが、いまや目覚ましい使い方がされています。シソーラスも、難しいと思われている部分もあるかもしれませんが、きっと瞬く間に女性たちが自分流に使っていくということが、今日、フロアの人とお話ししながら少し見えてきました。ぜひこれからも女性情報を、自分たちの活動に使っていくということで、活用していきたいと思います。どうも今日は長い時間ありがとうございました。